

2021.4
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

4号

第43巻
No.381



クロモジ *Lindera umbellata* Thunb.

(クスノキ科 *Lauraceae*)

生 薬 チョウショウコンピ（釣樟根皮）根を掘り上げ、水洗後皮を剥ぎ、薄く刻んだ後に陰乾する。

成 分 テルペン類： α -phellandrene, α -pinene, limonene, terpinene, dihydrocarvone、アルコール類：cineol, linalool, terpineol, geraniol, nerolidol、フラボノイド：pinocembrin, pinostrobin, linderachalcone、アルカロイド：laurolitsine, launobine 等。

効 能 民間薬として急性胃腸炎、下痢、脚気、浮腫に煎じて服用。粉末を切り傷の止血に外用。浴剤として湿疹、疥癬に、また腰痛、リウマチ、冷え性に効果がある。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



クスノキ科の植物はほとんどが常緑の大木で、熱帯、亜熱帯に分布していますが、クロモジは本州、四国、九州、中国中央部に自生し、幹は直立し、枝分かれが多く、樹皮は平滑で黄緑色で地衣類の一種が付着した黒斑があり、文字を書いたように見えることから黒文字の名が付いたと言われています。材は灰白色で緻密で軽く、洋傘の柄に使われています。葉は枝の上部に互生し葉柄があり、5－9cmの狭楕円形、全縁で葉質は薄く、表面に光沢があります。8－10月に枝葉を採り、水蒸気蒸留して得られるクロモジ油は香料として用いられ、輸出もしていました。春早く頂芽に接して淡黄色ないしは淡黄緑色の花を咲かせます。雌雄異株で雄花花序は10－13個、雌花花序は5－12個の花からなります。秋に球形の

液果を黒熟します。変種のオオバクロモジ (var. *membranacea*) は北海道南部から東北地方、北陸までの日本海側に自生し、葉が8－12cmと大きく、葉の表面にほとんど光沢がないが、クロモジとの中間型もあり区別がつけにくい場合もあります。また、ヒメクロモジ (var. *lancea*) は静岡、愛知県、紀伊半島、四国、九州に分布し、葉身は6－8cmの狭長楕円形で裏面は粉白色で絹状の毛があります。

日本では『本草和名』(918)に「釣樟根皮 和名奈美久奴岐」、『倭名類聚抄』(931－937)に「釣樟 和名久沼木」、『多識編』(1612)に「釣樟 和名志良久奴岐」と別な和名が記され、『花壇地錦抄』(1695)になって初めて「くろもじ 葉、えの木(エノキ *Celtis sinensis*)のごとく、木青し。ようじにつかう、くろもじなり」とあり、「くろもじ」の名が出てきます。『大和本草』(1709)にも「黒もじ 山中に生す。葉は漆に似て又榎に似たり。葉に大小の異あり。冬は葉落つ。皮、黒くして香氣あり。故に是を用いて牙杖とす。皮をつけ用ゆ。又ほようじと名つく。又其枝を籬とす。雅致を助く。二月に小黄花一所に多くあつまり開く。秋実のる榎の実の如し。肉に油あり。タブの実に似たり」と詳しい説明がなされています。中でも「葉の大」はオオバクロモジのことを指しているものと思われます。『用葉須知』(1726)には「釣樟根、即ち小葉のハタウコン、俗にクロモジノ木と云う。京北山に多し。山人、柴にして売る。仙台にてトリ木と云う。香氣あり。烏葉の一種也」と、『本草綱目啓蒙』(1803)には詳しく「山中に多し。小木なり。高さ六、七尺、木皮淡緑にして黒斑あり。香氣多し。皮を連ねて牙杖に製し売る。葉は細長くして堅く、柯樹(シイノキ属 *Castanopsis* ssp.) 葉に似たり。春初未だ葉生せざる先に花を開く。三、五簇生す。淡黄色五辨にして小し。後実を結ぶ。大さ南天燭子の如し。秋に至り熟して黒し。又一種大葉の者あり。又圓葉の者あり。俱に漢名詳ならず」と説明されています。

江戸時代の国語辞典『倭訓栞』(1777－1877)に「くろもじ 釣樟といえり。樹色黒く、葉茂れり。実も黒し、油に絞る。北地のがんじきの輪にも之を用う。よって名とす。延喜式・卯杖などにいう所の黒木にや」とクロモジの語源になったと思われる「黒木」の名が出てきます。卯杖は中国の風習からきたもので、『日本書紀』(720)の持統天皇(在位690－697)に「三年春一月二日、大学寮が卯の日に悪鬼を祓う杖八十本をたてまつった」とあり、飛鳥時代から行われていた行事で、「黒木」を用いていたかどうかははっきりしませんが、『延喜式』(927)の「大舍人寮」や「六衛府」で作る卯杖に使用する木として「木瓜三束、比比良木(ヒイラギ?)三束、牟保己(シキミ?)、黒木三束、桃木三束、梅木二束」などと記されています。この「黒木」を使って一部皮を残し、先を穂のように碎いて穂楊枝を作ったものを「黒楊枝」と言われていました。これに宮中の女房が使う忌み言葉に語尾に「もじ」をつける風習、例えば杓もじ、かもじ(髪の毛)などのように「くろもじ」となり、やがて木の名になったとも言われています。

(村上守一 記)